

令和元年度 徳島県立農林水産総合技術支援センター 農業大学校学校評価 総括表その1

<p>本年度の重点目標① 多様な進路に応じた人材育成 一人ひとりの社会的・職業的自立に向け、学生個々の進路やニーズに対応した教育を行い、生涯にわたる社会人・職業人としてのキャリア形成を支援する。</p>	<p>総合評価 A・<b>B</b>・C</p>	<p>(所見) 進路希望実現に向け、「農大進路指導計画」に基づき、進路希望調査と資格取得希望調査を定期的 に実施することにより進路希望を把握するとともに、徳島県農業法人協会と連携した就農相談会やイン ターンシップへの参加を通して進路意識の向上を図った。今年度の卒業生は全員が進路を確定するこ うできた。また四年制大学への編入を希望する学生に対しては、複数の教員で役割分担を行い、希望 大学の試験内容に沿った個別対策を行った。結果1名が国立、1名が私立四年制大学の編入試験に合 格した。 普段の授業に関しては、配布物やパワーポイントなどを活用してわかりやすい授業の実践に努めてい る。また、平成26年度より実施している授業評価を通して授業者自身が見直しを行い、日々授業改善に 取り組んでいる。 農大祭をはじめとする各種行事は学生自治会が中心となって全学生が協力して行い、模擬会社「そら そうじゃ」では企画開発部、品質・農場管理部、営業部、総務・経理部に別れ一般の客相手に販売活動 を行っている。こういった活動は学生の実践的経営管理能力やコミュニケーション力を育てるとともに、主 体的に課題を見つけて改善していく、問題解決能力の育成に貢献している。学校評価アンケートでは自 治会活動に主体的に取り組む学生の割合は増加傾向にあるのに対して「そらそうじゃ」の活動が商品開 発や販売技術の向上につながったことを自覚するまでには至っていない学生が四割近くいるという結果 が出ており、なるべく多くの学生が成長を実感できるような取り組みにしていくことが課題と言える。 以上の観点から、「多様な進路に応じた人材育成」に係る総合評価をB(概ね達成できた)とした。</p>
---	------------------------------	---

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
① キャリア プラン ニング (将来 設計) 能力	1 進路希望調査、三者面談、進路 相談会等を実施し、1年次生のうち から学生に早期の進路決定意識を 醸成させ、進路決定を支援する。	個人面談を年間3回以上実施し、 1年次の後期開始時点での進路目 標決定者を90%以上にする。	進路指導計画に従って、進路希望調査を4回実施し た。冬休み明けの第4回調査(1月8日実施)では、1 年次の進路目標決定者は93%であった。	A		就職活動の3月1日解禁と 同時に、就職希望者全員が就職 活動を始めるような働きか けを確実に実施する。説明会 の出席や採用試験エントリー の時期を逃さないように、業 界ごとの採用試験時期の目安 を学生に周知する。
	2 公共職業安定所や人材育成会社 と連携したキャリア教育を推進す る。	1年次後期から2年次前期にか け、公共職業安定所と連携した進 路ガイダンスを2回以上実施する。 2年次では人材育成会社による キャリア教育を2回以上実施する。	1年後期と2年前期に公共職業安定所と連携した就職 ガイダンスを実施し、2年後期には徳島県すだちくんハ ローワークと連携して就職未決定者に対する就職ガイ ダンスを実施した。また2年次生には人材育成会社による キャリア教育の講義を2回実施するとともに、農業法人 協会との連携により、2年次前期に農業生産法人との交 流会を開催し、各生産法人毎にブースを設け会社説明を 聞いた。進学希望の学生には、専門科目の補習や論文作 成、口頭試問対策、面接指導を行った。	A	A	農大の学生は、就職活動のスタ ートが遅れる傾向があるた め、就職ガイダンスに加え、 早期の就活セミナーへの参加 などを指導する。県農業法人 協会との交流会は就職先を考 えることができるよい機会で あるため、今後も6月中まで には実施する。
	学校評価委員の意見	定期的な面談や就職ガイダンスがよく行われており、学生の進路意識向上に効果的である。 学生たちの進路目標に対して、こまめな対応を行い情報収集・提供を積極的に行っており大いに評価できる。 関係機関との交流会を含め、多様な個別活動や指導が行き届いており、その結果が「農大の就職率は良い」という世間の評判にもつながっている。 今後も幅広い進路指導を進めてほしい。				

※「評価」及び「総合評価の評定」の基準 A:十分達成できた B:概ね達成できた C:達成できなかった

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
② 個々のニーズに基づいたマンツーマン指導の充実	1	学生に基礎的・基本的知識を確実に習得させ、学力向上を図る。	職員の授業改善に係る肯定的評価を90%以上にする。 講義で行われる教養科目・専門科目、それぞれの不認定者数を10%未満にする。	職員の授業改善に係る肯定的評価は100%であり、各教職員が学生に基礎的・基本的知識を習得させるため、授業改善を図ったが、不認定者が10%を超える科目は6つあった。	B	演習科目では6科目で不認定者が10%以上となったが、出席日数不足が主な原因であり、次年度に向けて実践学習面への動機付けとモチベーションの維持が課題となる。
	2	進学希望者には、「進学対応カリキュラム」により、学力向上を支援する。特に編入学試験等で必要となる英語・小論文・口頭試問においては、補習や個別指導を行う。	学生アンケートを実施し、「進学対応カリキュラム」と「個別指導」の有意性に対する肯定的評価を80%以上にする。	補習授業と個別指導の有意義性に対する肯定的評価は78.9%となり、目標達成はならなかった。年度当初の進学希望者3名のうち2名まで進学することができ、残りの1名は就職に進路変更し、無事内定を得ることができた。	B	外部講師の進学科目について、補習や個別指導が難しいため、学生個々の到達段階等の情報共有をより一層深める必要がある。
	3	就職希望者には、就職セミナーやガイダンス等の実施により、早期から就職活動意欲の醸成を図る。また、1年次より就職補習を定期的に実施し、基礎学力の向上を図ると共に、履歴書やエントリーシート等の作成を支援する。	就職セミナー、ガイダンス等を年間2回以上実施する。 2年次生を対象に、「履歴書の書き方講座」、「面接対策講座」を開催する。 就職補習に対する学生の肯定的評価を80%以上にする。	就職ガイダンスを年間2回実施した。1年次生・2年次生ともに、6月には農業生産法人との交流会に参加し、就職活動意欲の醸成を早期から図った。就職ガイダンスの中で履歴書の書き方と面接対策、電話応対について講義を開催し、その後実際に学生が作成した履歴書を添削指導した。就職補習に対する学生の肯定的評価は78.9%で、目標の80%には若干届かなかった。	B	就職ガイダンスは引き続き、年間2回以上実施する。「履歴書の書き方講座」と「面接対策講座」については進路担当教員だけでなく、各コース担当教員とも連携を図る。会社への電話連絡を苦手とする学生がいるため、就職ガイダンス時とは別に、電話応対の練習を個別に繰り返し行う。
	4	学生のニーズに対応した資格取得特別講座を開催し、資格取得を支援する。	造園技能検定、危険物取扱者試験、毒物劇物取扱者試験、大型特殊免許、大型特殊けん引免許、日本農業検定、フォークリフト、わな猟免許、家畜人工授精師等に係る特別講義を開催する。学生の80%以上が特別講義を受講する。	「自分の進路や希望に応じて、資格取得特別講座を受講し、資格試験にチャレンジした」と回答した学生は86.0%であった。また、危険物取扱者試験、毒物劇物取扱者試験、大型特殊免許、大型特殊けん引免許、フォークリフト、農業技術検定、土壌医検定、狩猟免許等の特別講義を開催し、卒業までにどれか1つでも講座を受講した学生は95.2%であった。	A	一部の講座では定員等の条件により受講できない科目や合格率が低い資格もあることから、運営手法や補講なども必要に応じて検討していく。
	5	2年次生一人ひとりの進学・就職活動に向けて、面接・マナー・口頭試問等の個別指導を実施する。	面接・マナー・口頭試問の指導を充実するため、受験レポートを分析、作成した「就職試験受験報告書」、「就職試験でよく聞かれる質問集」、「就職試験面接指導マニュアル」の充実をはかり、個別指導に活用する。 年度末の進路決定率を90%以上にする。	就職試験受験報告書などを活用し、各学生の就職試験前には可能な限り全員に個別指導を行った。就農10名、その他の就職9名、4年制大学進学2名となり、卒業までに全員の進路を確定することができた。	A	1年次生の就職希望者には、3月1日の就職活動解禁日まで第1希望就職先用の履歴書を完成させる。次年度以降の受験のために、就職試験受験報告書の作成を、受験した全学生に徹底する。
学校評価委員の意見		様々な資格が取得できるのは魅力的。 農大は、基本的に農業に関係する担い手養成機関と思うが、多様な進路要望の学生が入学しており、その要望に応えるマンツーマン指導がきめ細かく進められている。 就農した学生が全体の約半数の10名というのはマンツーマン指導の賜と思われる。 座学と実習・演習を組み合わせることで一層の学力向上・意欲向上が期待できると思われ、欠席が原因で単位不認定になる学生の割合が多い科目があるのは課題と言える。				

※「評価」及び「総合評価の評定」の基準 A:十分達成できた B:概ね達成できた C:達成できなかった

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
③ 高度情報化への対応とコミュニケーション能力並びに問題解決能力の育成	1 現在のパソコンにおいて事実上の「標準」となっている「Microsoft Office」の各ソフトウェアを活用できる能力を育成する。 実習や模擬会社の運営において、スマートフォンやタブレット等の情報端末の活用を推進する。	学生アンケートで情報活用能力に関する自己評価を実施し、ワード、エクセル、パワーポイントを活用できる学生を90%以上にする。	「ワード、エクセル、パワーポイントなどの基本的な使い方を習得できた。」という項目に肯定的な回答をしたものが、1年次生では88%、2年次生では84%であった。また、「学習や体験したことを分かりやすくまとめ、パワーポイントなどを用いて説明することができた。」という項目に肯定的な回答をしたものが、1・2年次生共に約79%であった。	B	B	「ワード、エクセル、パワーポイント」を習得して十分に活用できるように、その利用の指導に努める。
	2 プロジェクト学習における計画段階から調査・研究に至る一連の取組や、それらの成果や課題をまとめ、発表する機会を設定することにより、正確かつ的確な情報伝達能力、並びにプレゼンテーション能力を育成する。	コース内で、プロジェクト学習の進捗状況を発表する機会を、年間3回以上設定する。 学校行事として各種プレゼンテーションの機会を3回以上設定する。	プロジェクトの計画発表、中間発表、成果発表の練習も兼ねて、コース内で進捗状況を発表する機会を設けているのに加え、農業青年の集いで発表する代表者を決定する際にもコース内で発表を行い、プレゼン能力の向上に努めた。 学校行事として各種プレゼンテーションの発表の機会を4回設定し、回を重ねる毎に発表内容や態度に深化がみられた。	A		一部に内容に対する理解が十分でない場合も見受けられるため、試験設計の段階からの指導・助言を充実させる。
	3 ワークショップやグループ活動等、知識を相互作用的に活用する機会を授業や実習に取り入れ、言語活動を活性化させることにより、思考力・判断力・表現力等を育成する。	コース演習の30%以上を、話し合い、討論、ワークショップ等の言語活動に充てる。	コース演習の時間を使い、各自のプロジェクトの進捗状況報告や、共同で栽培する作物の検討、試作商品の改善点の話し合いなど、様々な手法で言語活動を行った。コース演習の時間全体の中で6割程度は言語活動にあてることができた。	B		議題となっている内容に対して学生自身がより主体的に考えるとともに、他者の意見にも耳を傾け、建設的に話し合いを展開していく姿勢を醸成する。
	学校評価委員の意見	<p>高度情報化において、パソコンの活用による能力開発は不可欠であるが、学生の能力アップの指導に当たる先生方の労をねぎらいたい。これからの社会は人口減少を背景に厳しい時代が予想され、若い人達は新たなビジネスモデルの展開を模索しなければならない。徳島農大からも、国際感覚を持ち、スマート農業にも対応できる新たな人材の登場を期待する。パソコンの各ソフトの習得も大事だが、スマートフォンやタブレットの活用もより一層増えてくると思われる。農業関係のスマホアプリなども様々な場面で意図的に活用し、その効果を検証して欲しい。また、専門の外部講師によるスマホアプリの企画・開発などに関する講義を行ってはどうか。</p> <p>(農大:令和元年度に夏休み中の特別講義としてスマート農業研修を実施し、ICT機器の農業への活用について学んだほか、令和2年度からは新たに「ICT利活用」の授業を設定し、スマホアプリを含む先端農業についての学習を導入することになっている。また、一部のハウスでモニタリングシステムも導入され、希望する学生はスマホやコンピュータを使って圃場のデータ収集や記録などができるようにもなっている。プロジェクトにおいて、こういった情報機器を必要に応じて積極的に活用していくよう指導していきたい。)</p> <p>学生のコミュニケーション能力の低下が指摘されている昨今、発表の機会を4回も設けている点はすばらしい。</p> <p>学生の小グループで発表する機会を設け、学生同士で互いの研究内容や発表の仕方などを検討・修正し合える場を設定するとさらにコミュニケーション能力向上につながると思われる。</p>				

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
④ 体験的な学習活動による実践力の育成と社会性の醸成	1 学生実習やプロジェクト学習を「そらそうじゃ」の業務や商品開発と一体とみなし、各業務担当ごとの実践的な運用手法を策定し、組織的に指導助言できる体制をつくる。	「徳島農大そらそうじゃ」の業務担当単位で活動する時間を、月1回以上確保する。策定する運用手法に対する学生と職員の肯定的評価を80%以上とする。	学生アンケートを2回実施した。業務担当者を年間10回実施するとともに、業務担当者会に1年次生も回数多く参加できるようカリキュラムを工夫した。運用手法に対する評価では、学生67.4%、職員40.0%と、目標を下回る結果となった。	B	A	業務担当者会を毎月開催するとともに、新商品開発クラブと連携して商品開発・企画力の向上を図る。
	2 模擬会社「徳島農大そらそうじゃ」の運営や活動を通して、個人の責任や協力を重んじる態度や姿勢を農業大学校の文化として定着させる。	学生アンケートを実施し、模擬会社活動における「責任感」や「協力」等に関する肯定的評価を90%以上にする。	学生アンケートを2回実施した。きのべ市や出張販売等において店長等の役割を明確にして活動を行った。活動に対する評価では、1年次生75.0%、2年次生84.2%の評価であった。	B		各担当課毎の協議を充実することにより、模擬会社内での責任感や積極的に協力する意識の向上に努める。
	3 「徳島農大そらそうじゃ」の活動や「きのべ市」の開催に関する広報活動を積極的に行い、「きのべ市」の知名度向上とファンの増加を図り、来店者の増加を目指す。	「徳島農大そらそうじゃ」HPとフェイスブックの中で、「きのべ市」の開催案内や模擬会社の活動状況及び成果を月に3回以上の情報発信ができるように取り組む。	HPでの開催案内が5回、Facebookでの活動状況発信を63回(3/5現在)実施し、合計68回の情報発信であった。	A		活動情報発信の主体をFacebookからInstagramに変更し、内容をさらに充実するとともに、販売活動や新商品開発情報などの発信も積極的に行うなど情報発信力を強化する。
	4 学生の研究課題や進路に対応した校外での「農業・6次産業体験学習」を実施し、研修先での職業体験を通じて、実践力や人間関係能力を育成する。	学生が積極的に農業体験学習に参加し、知識や技術等の実践力を身につけたかを調査する。それらの肯定的評価を90%以上にする。	学生に対し、受入農家の期待や好意に応えられるよう、指導された内容を覚え、記録するよう指導した。受入農家、企業を訪問し、学生の研修態度などについて情報交換を行ったところ、真摯に望む姿勢があり、良好な評価をいただいた。学生が作成した報告書や体験学習発表会の内容からは、全ての学生に、実際に働く際に有効な知識・技能の習得や責任感の芽生えが確認できた。	A		日頃の生活体験が乏しい世代であり、より積極的に、また主体的に受入れ先と関わり、実践力や社会性を向上させる必要がある。
	5 「農業体験学習」に係る報告書作成や成果発表会等の活動を通じて、学生の気づき、発見、成果と課題等を共有させる。	事前・事後の指導を徹底すると共に、報告書作成に係る個別指導をしっかりと行い、成果発表会の不合格者数を0にする。	体験学習後や各種発表会の準備の際には報告書の書き方、伝わるスライド発表の方法等の指導を徹底した結果、実践力、社会性が向上した。成果発表会はもちろん、その他の発表会でも不合格者はいなかった。	A		各学生が研修に明確な目的をもって、積極的な姿勢で臨むことで、より充実した研修となるよう指導していく必要がある。
学校評価委員の意見		「そらそうじゃ」の運用方法に関するアンケート結果が学生、職員ともに低いのが気になり。「そらそうじゃ」は農業経営を学ぶ全国に例のない取り組みであり、学生が主体的となったビジネスモデルとして素晴らしい。学校を取り巻く社会への窓口が大きく広がり、ビジネス感覚の養成にもつながる。物を売ったり買ったりだけでなく、今後とも社会的な基本ビジネスの学習の場として幅を広げてほしい。情報発信の回数が多いことが高く評価できるが、それが「きのべ市」等の知名度向上や来客数の増加にどうつながっているかも検証が必要。次年度への課題にもあるように、学生に明確な目的があると受け入れ農家も指導がしやすいと思う。				

※「評価」及び「総合評価の評定」の基準 A:十分達成できた B:概ね達成できた C:達成できなかった

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
⑤ 特別活動・自主・自律性の醸成と仲間づくりによる課外活動の活性化	1 学生のサークル活動や自治会活動を充実させ、活力のある学生生活を支援する。	農大祭においてサークル活動や自治会活動の成果を展示する。 農学連スポーツ大会への全種目参加、ならびに競技の運営協力を通じ、他県の学生と交流を深める。	職員室前や食堂前の通路にGOGO農大3年分を常時展示しており、サークル活動や自治会活動について紹介した。農学連スポーツ大会への全種目参加、ならびに競技の運営協力を通じ、他県の学生と交流を深めることができた。また今年度新たにガーデニングサークルと新商品開発クラブが新設され、学生のサークル活動の活性化が見られた。学生アンケートでは自治会やサークル活動に積極的に取り組んだ割合が76.7%で、過去最高の値になった。	B	A	サークル活動や自治会活動を充実させるとともに、学生が成果展示物等を作成する時間確保や手法の習得を支援する。
	2 学校行事(剣山登山、農大祭、収穫祭、スポーツ大会等)を活性化させ、積極的な参加意識を醸成するとともに学生間の仲間づくりを支援する。	各学校行事の事後アンケートを実施し、学生の満足度を80%以上にする。	学校評価アンケートの各学校行事に積極的に参加したかと、各学校行事は仲間作りをしたり連帯感を高めたりするために役立ったかを問う項目では、どちらも86.0%の肯定的回答を得ることができた。	A		今後も引き続き学校行事の充実に努める。
	学校評価委員の意見		伝統となっている学校行事は高い教育効果が期待できるものがあるので引き続き実施して欲しい。「GoGo農大」で学生の楽しそうにしている様子が見られ、満足度が高いことが分かった。			
課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
⑥ 積極的な教育活動の改善並びに学校運営の改善	1 定期的に課長会、コース会等を実施し、学生の学習や生活について情報交換をし、教育課題の設定並びに指導の標準化を図る。 高等学校との連絡・連携を密にし、学生の生活指導や教育活動の改善に活かす。	課長会を月1回以上、コース会を月2回程度実施する。 組織アンケートを行い、学生の理解を深める情報交換や組織力等に係る職員の肯定的評価を90%以上にする。	課長会開催回数は、昨年より3回多い19回開催した。各コース会も月2回程度実施した。学生の学習状況や生活状況について情報交換を行い教職員間で共有。学生指導について指導方針を協議しながら共通認識とした。また、本年より始業時に朝会を実施。1日のスケジュールの情報共有及び学生への指示事項の共通認識化を図った。このようなことから、今年度はすべての教職員が、積極的な教育活動及び学校運営の改善向上がされたと感じている。教員対象の学校評価アンケートでも職員間の情報交換に関する肯定的回答は100%と高い値を示した。	A	A	学生の状況や個々の教職員の教育活動についてより共有し、より透明性の高い学校運営に努める。
	2 定期的に、学校教育目標に基づく具体的な取組のモニタリングを実施し、指導の進捗状況や適切さを評価する。	学校の組織化と職員の協働意欲の高揚を図るため、課長会において、コースや校務の取組やその課題について共有する場を設定し、体制の維持・発展を図る。 また、指導の進捗状況を適切に評価するため、校務分掌やコースの業務に関するモニタリングを年2回実施する。更に、外部評価も行うこととする。	教員対象学校評価アンケートの、課長会での積極的な情報発信や教育活動及び学校運営上の諸問題への取組に関する項目では90%の肯定的回答が得られ、改善に努力していることが示された。また、外部評価委員会において、今年度からのコース再編を含めた農大の教育体制は高く評価された。	A		学校評価結果を活かした目標を設定し共有することにより、協働体制を推進する。教職員間の連絡体制を密にし、意欲を持って学校運営に参画できる雰囲気をつくる。
	3 課長会において、最新の教育事情、学生指導、危機管理、コンプライアンス等に関する研修を継続的に実施し、教職員の資質向上を図る。	課長会において、教育指導改善や学校運営改善につながる研修(勉強会)を継続実施する。	昨年に引き続き、課長会において学生指導、授業改善及びコンプライアンス等の研修を開催し、教職員の資質向上を図った。	B	成果があった指導や研修等は、課長会で発表するなど学校全体で共有化する。	
学校評価委員の意見		課長会やコース会、朝会で職員間の協働意識が高まり、様々な改善につながっている。職員同士がワンチームになって取り組んでいる様子が見て取れる。				

※「評価」及び「総合評価の評定」の基準 A:十分達成できた B:概ね達成できた C:達成できなかった

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
⑦ 心の通う人間関係を構築する能力の素地養成	1 学生間の人間関係におけるいじめなどを早期発見し対応する教職員組織をつくる。	「いじめ発見のための考察ポイント(教員用)」を、年2回教職員で確認し、問題点があれば速やかに対応する。	年間計画に従い、6月と11月に、「いじめ発見のための考察ポイント(教員用)」を教職員で確認した。いじめの枠組みにとらわれず、悩みを抱えていそうな学生などに関しては職員会で共通理解を図り、必要に応じて学生と面談を行うなどして、心理的なサポートにも努めた。 10月と2月に実施した学校評価アンケートにおいて、「授業や実習や行事を通じて、学生の人権意識を高めるよう努めた。」と答えた教員は、90.0%であった。	A	A	「大学校いじめ防止基本方針」に基づき、いじめを許さない教職員組織づくりに努め、「いじめ発見のための考察ポイント(教員用)」を活用して人権意識の高揚を図っている。次年度以降もさらに高い段階の組織づくりに努める。
	2 学生ひとりひとりの人権意識を醸成し、学生間での人権意識の共存を確立する。	学生に「学校生活に関する調査」を年2回実施し、問題がある回答を記載した学生およびその関係する学生に、面談を通して聞き取りをし、必要な対処をする。	年間計画に従い、6月と11月に、「学校生活に関する調査」を学生に実施し、「いじめ相談と心の相談の主な機関の一覧」を配布した。調査において気になる回答をした学生には面談を実施することで、問題の芽を早期に認識し、教員間で連携して適切な対応ができた。学校評価アンケートの「人権を大切に作る仲間づくりができた」の項目に肯定的な回答をした学生は88.1%と高い値であった。	A		「大学校いじめ防止基本方針」に基づき、普段の授業や実習を通していじめを許さない仲間づくりに努めるとともに、「学校生活に関する調査」等を活用し、表面化しにくい心の声にも耳を傾けるよう努めている。次年度以降もさらに学生の人権意識が醸成されるよう努める。
	3 より多くの関係者が学生の悩みや相談を受け止めることができるようにするため、学校と家庭が組織的に連携・協働する体制を構築する。	保護者が来校する三者面談等の機会をとらえて、「いじめ発見のための考察ポイント(保護者用)」を保護者に配布と説明をし、保護者がいじめを早期発見できるようにする。	1年次生の保護者には4月、2年次生の保護者には5月の三者面談にて、「いじめの発見のための観察ポイント」および「いじめ相談と心の相談の主な機関の一覧」を配布・説明すると同時に、学生に関して気になることがあれば、いつでも学校に相談するよう訴え、小さいものでも問題があれば、職員が情報共有し連携強化を図った。	A		三者面談で「いじめ発見のための考察ポイント(保護者用)」を配布し、説明することで、心配な点があれば相談しやすい環境ができています。次年度以降も学校と保護者の連携をさらに密にし、学生の悩みに早期対応できるように努める。
	学校評価委員の意見	教職員の問題意識の共有と、学生や保護者との面談は安全安心な人間関係の構築に有効であると思われる。農大の2年間は、学生にとって多感な難しい年代であり、先生方の目配りが大切。小さなことでも注意深く見てあげて欲しい。				

令和元年度 徳島県立農林水産総合技術支援センター 農業大学校学校評価 総括表その2

<p>本年度の重点目標② 地域農業への寄与 農業体験学習、模擬会社の運営、6次産業化への取り組みなどを通じて、社会との連携を深め、総合的な指導体制のもと、幅広い経営能力を養成するとともに、地域農業等に寄与する。</p>	<p><b>総合評価</b> ◎ A・B・C</p>	<p>(所見) 農業生産技術コースでは、「栽培から販売までの知識と技術を持った人材の育成」を課題として、年間を通して多種多様な果樹・野菜・花き・畜産を扱うことにより、学生の栽培・飼養管理における知識・技術の習得を支援した。学生プロジェクト12課題のうち、10課題において、家業を含む地域農業の諸課題について検証・改善した。卒業生12名のうち、自営及び就職就農は8名、農業団体・農業関連企業への就職は3名、公務員は1名となった。 6次産業ビジネスコースでは、実習を通じて農業技術の基礎を学ぶとともに、プロジェクト学習において様々な6次化の事例等も示しながら、消費者ニーズを把握しつつ加工品の商品化に取り組む等、新たなビジネスモデルに向けた活動を推進した。卒業生9名のうち7名は高付加価値販売に関連した取り組みや調査などを卒業論文に組み込み、研究を行った。進路に関しては就農2名、農業団体・農業関連企業5名、四年制大学への編入2名となった。 各コースで栽培した農作物や、それを原料に開発した農産加工品などは模擬会社「そらそうじゃ」の活動を通して学生自身が県内外で販売を行い、実践的な経営能力の育成にも努めた。また、今年度から新商品開発クラブが発足し、コースや各自のプロジェクトの枠にとらわれず、自由な発想で農産加工品の開発を行いやすい体制も整った。これらの活動はこれまでと同様、ホームページやFacebook、校内新聞のGoGo農大などを通して広く地域社会に発信している。 以上のことから「地域農業への寄与」に関する総合評価はA(十分達成できた)とした。</p>
---	--------------------------------	---

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
<p>① 栽培から販売まで(農業の生産知識と技術を持った人材の育成)</p>	<p>1 栽培・飼養管理について役割分担し、日々の栽培・飼養管理を主体的に実践させ、年間を通じた体系的・実践的な農業の知識並びに技術を習得させる。また、先進的な栽培方法について知見を深める。</p>	<p>学生が栽培・飼養に関する知識及び技術を習得して、それぞれがこれまでの経験に基づく農業の課題解決に努め、生産技術の向上につながるプロジェクト課題を80%以上設定する。</p>	<p>栽培・飼養管理について、プロジェクト課題を通じて、学生の将来を想定した形で実施した。また、研究部門との連携で、より高度な技術習得、年間を通じた切れ目の無いプロジェクトを実践するように努めた。生産技術の向上につながるプロジェクト課題に取り組んだ学生は12人中10名で83%であった(残りの2人は花の加工技術と畜産の疫学的な内容)。</p>	A	A	<p>プロジェクト課題での取り組みにおいて、地域農業への寄与のために、地域の農業支援センターとの連携を深めて、課題設定の参考とする。</p>
	<p>2 「農大祭」や「きのべ市」で販売する果物、野菜、花苗等の栽培方法、機能性や調理方法等について学習する時間を設け、十分な知識を習得させる。</p>	<p>農産物の栽培・貯蔵・流通・調理法等に対する学生の知識に関する調査を、来客に対し実施するとともに、生産現場の視察研修や実践を授業時間を活用して実施し、理解度を80%以上とする。</p>	<p>「農大祭」、「きのべ市」で販売する果実、野菜、花きの栽培や加工品等の生産、農業生産現場の視察研修等を授業時間を活用して実施して、技術習得に努めた。学校評価アンケートの該当項目でも88.0%の肯定的回答を得ることができた。</p>	A		<p>「農大祭」、「きのべ市」での販売以外での販売について、キョーエイ等での販売でも強化を図る。</p>
	<p>3 地域の特徴を活かした作目の課題を解決するための高度かつ専門的な栽培・飼養技術を実証するとともに、その技術の有用性を、作目の需要や生産効率なども含めて総合的に判断する力を育成する。</p>	<p>地域に貢献できるような課題解決プロジェクトを選抜して、その成果を地域に発信する。</p>	<p>地域に貢献する課題解決プロジェクトについて、学生が取り組み、農大のホームページ、センターニュース、石井CATVにそれぞれ1課題発信した。</p>	A		<p>家業を基本として、地域に貢献するプロジェクト以外に、更に大きな視点による農業生産に貢献できるプロジェクト課題に取り組む必要がある。</p>
	<p>学校評価委員の意見</p>	<p>コースの人材育成課題に対応したプロジェクトが実施できており、今後一層の深化を期待する。プロジェクトの課題は農家にとっても知りたく、勉強になる内容だった。</p>				

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
② 農作物の付加価値販売につながるビジネススキ ルを身に付けた人材の育成 (6次産業ビジネスコース)	1	学生のプロジェクトにおいて、「6次産業化」を視野に入れた新たな農業ビジネスモデルを研究・実践し、成果を卒業論文に盛り込む。	プロジェクトで「6次産業化」を視野に入れた農業ビジネスモデルの研究に取り組む学生を50%以上にする。	コース所属の2年次生9名のうち7名(78%)が、「6次産業化」を視野に入れた卒業論文を作成した。また、1年次生10名は全員(100%)が6次産業化を想定したプロジェクト活動を計画しており、新たな付加価値の創造をめざしている。	A	A 6次産業体験学習などの機会に学生が技術、感性を磨くよう動機づけ、学生の創意工夫を生かしたプロジェクト活動に取り組む。 消費者はもとより、生産者、販売業者などと積極的に対話し、多様な価値観、考え方に触れるように取り組む。 課題解決の手法を理解し、活発な意見交換ができるように促す。
	2	学外での実践活動における、市場調査等を通じて、消費者や社会のニーズを把握、分析し、商品開発や販売戦略等に活かす。	プロジェクトで市場ニーズの調査を行う学生を50%以上にする。	コース所属の19名のうち12名(63%)が、学生が模擬会社そらそじゃの県外販売研修などの機会を通じ、消費者との意見交換やアンケートを実施し、プロジェクト研修に反映させた。	A	
	3	コース実習、卒業論文等の課題解決の過程に「プロジェクトマネジメント」、「ブレインストーミング」等の各種の手法を習得させる。	1つ以上の課題解決のための手法を利用できるようになった学生を80%以上とする。	各種手法を利用し課題解決を図る指導を行ってきたが、学校評価アンケート結果では、課題解決の各種方法を上手く活用できると認められる2年次生は9名のうち5名(55%)に留まった。	B	
	学校評価委員の意見		六次産業化の取り組みも毎年向上がうかがえる。二次産業を担う立場として、一次・二次・三次の枠にとらわれることなく、共にビジネスパートナーとして社会に貢献してゆかねばならないと感じる。農大で作った商品を一般のスーパーや産直市で販売し、一般の方の評価も取り入れることで、更なる改良や新しいアイデアにつながるのではないかと思う。市場調査や課題解決の手法を上手く活用して6次産業化のプロジェクト内容を充実させて欲しい。			

※「評価」及び「総合評価の評定」の基準    A:十分達成できた    B:概ね達成できた    C:達成できなかった

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
③ 地域農業への寄与のための体制づくりと、研究成果や学生生活活動に係る積極的な情報発信	1 平成24年度より導入した加工関連講座を充実させると共に、平成30年度より稼働した六次産業化研究施設を活用し、商品開発に取り組み、地域社会へ発信する。	コースや模擬会社において、加工品を2品以上試作し、地域に発信する。	6次産業ビジネスコースにおいて、阿波晩茶や梨など、新たに16種類のアイスクリームを商品開発し、約800個を販売することができた。 学生による新商品開発クラブが設立され、さつまいもようかん、すだちゼリー、サツマイモ最中を試作、農大祭を中心に販売を行った。	A	A	引き続き、新商品開発クラブを中心に、すだちやサツマイモを使った商品を開発し、情報発信していく。
	2 学生の研究や学校生活、「そろそろじゃ」の活動状況等定期的な広報等を作成する。 また、農大HPその他の情報発信ツールを活用して農業関係機関、関連企業、高等学校だけでなく、一般社会に対しても積極的に情報発信を行う。	教育活動に関する広報紙を年間12回以上作成して公開する。 HPを2週間程度で更新し、最新の情報を地域社会に発信する。	教育活動に関する広報紙を年間12回以上作成して、公開した。 農大HPの更新については、微細な変更を含めると100回程度更新・修正を行い、最新の情報にその都度更新を行い、地域社会に発信を行った。	A		引き続き、広報紙の発行と農大HPの更新を行い、積極的な情報発信を行う。
	3 本校の教育活動に関して積極的な情報発信・広報活動を行い、未来の徳島県農業を担う意欲と活力に満ちた新入学生を確保する。	高校訪問を年間2回以上行い、高校でのガイダンスにも積極的に参加する。 また、義務教育や高等学校の依頼があれば、キャリア教育に係る体験的な活動の実施に協力する。	県内全域で高校訪問を年2回行い、高校教員に対して本校の取り組みを説明すると共に、高校や本校での進路ガイダンスの依頼も積極的に受け入れ(年間17回)、高校生の農業に対する興味・関心の醸成に努めた。 また、高等学校農業クラブリーダー研修会及び緑の学園等、キャリア教育に係る体験的な活動の実施に協力した。	A		引き続き積極的に行う。
	学校評価委員の意見	栽培技術・販売力・加工開発等学生さん達の取り組みが多岐にわたり、先生方とマンツーマンや組織力を活かした情報発信は高く評価できる。高校生への広報もありがたい。発行している「GoGo農大」などは、農大の活動内容が視覚的に分かりやすい。農業高校の進学コーナーに掲示してもらうように働きかけ、少しでも多くの高校生の目に触れるようにしてほしい。 (農大:夏と冬の本校職員による県内の高校訪問の際に「GoGo農大」も一月分だけ持参しているが、数ヶ月分に増やしたり、高校側に迷惑でなければ掲示していただくようお願いしたりするようにしたい。) 年次報告で、卒業論文が地域農業を考えたテーマ設定であることや、教育活動の内容などがよく分かった。 学校評価の評価指標に目標とする入学生数を追加し、入学希望者の増加につなげてはどうか。 具体的には、ハローワークに農大の募集案内を置き、職業訓練の手段として農大を考えてもらう、四年制大学で募集案内を掲示したり、入学説明会を開催したりする等。				

※「評価」及び「総合評価の評定」の基準 A:十分達成できた B:概ね達成できた C:達成できなかった